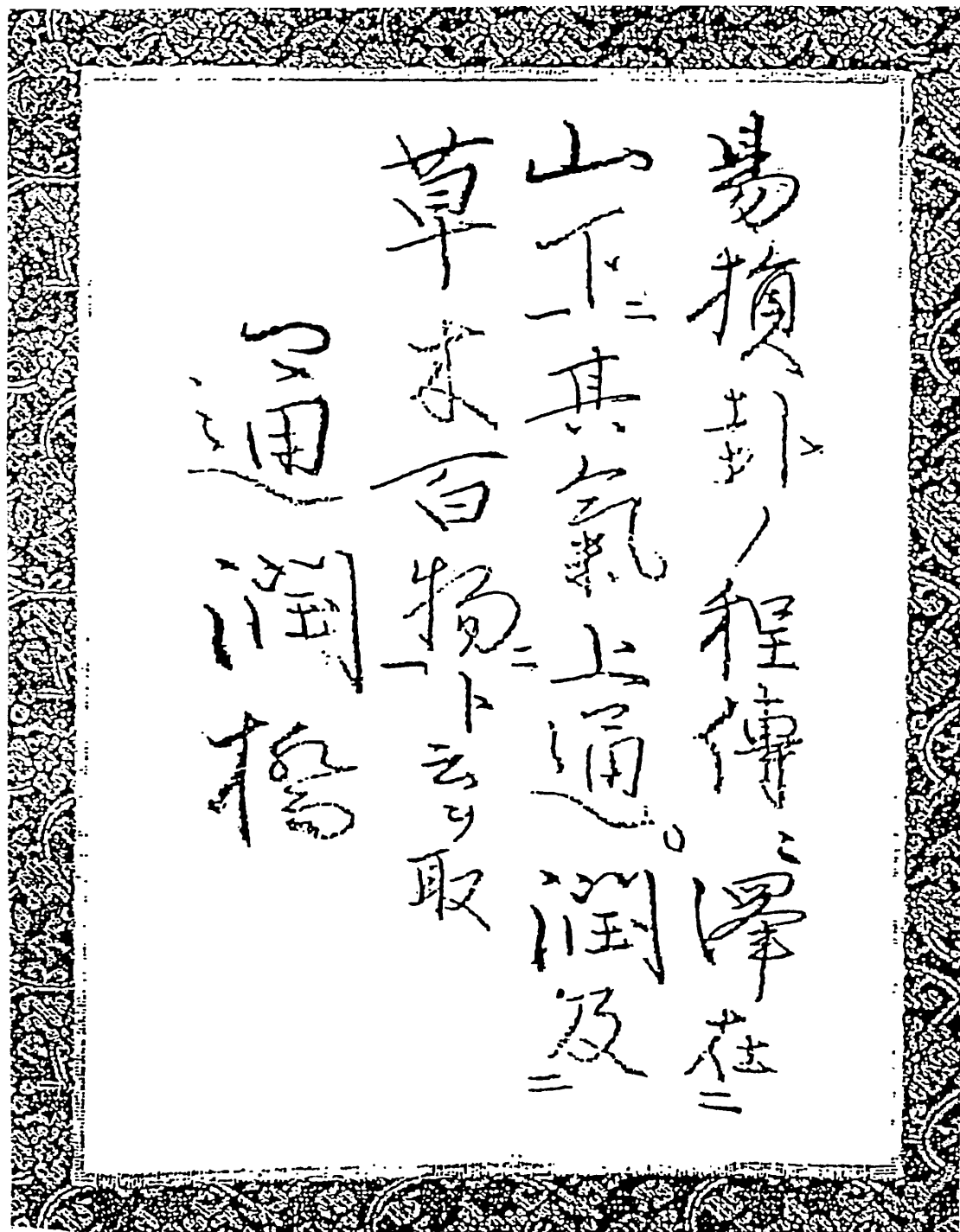




布田保之助翁肖像



「通潤橋」名前の由来

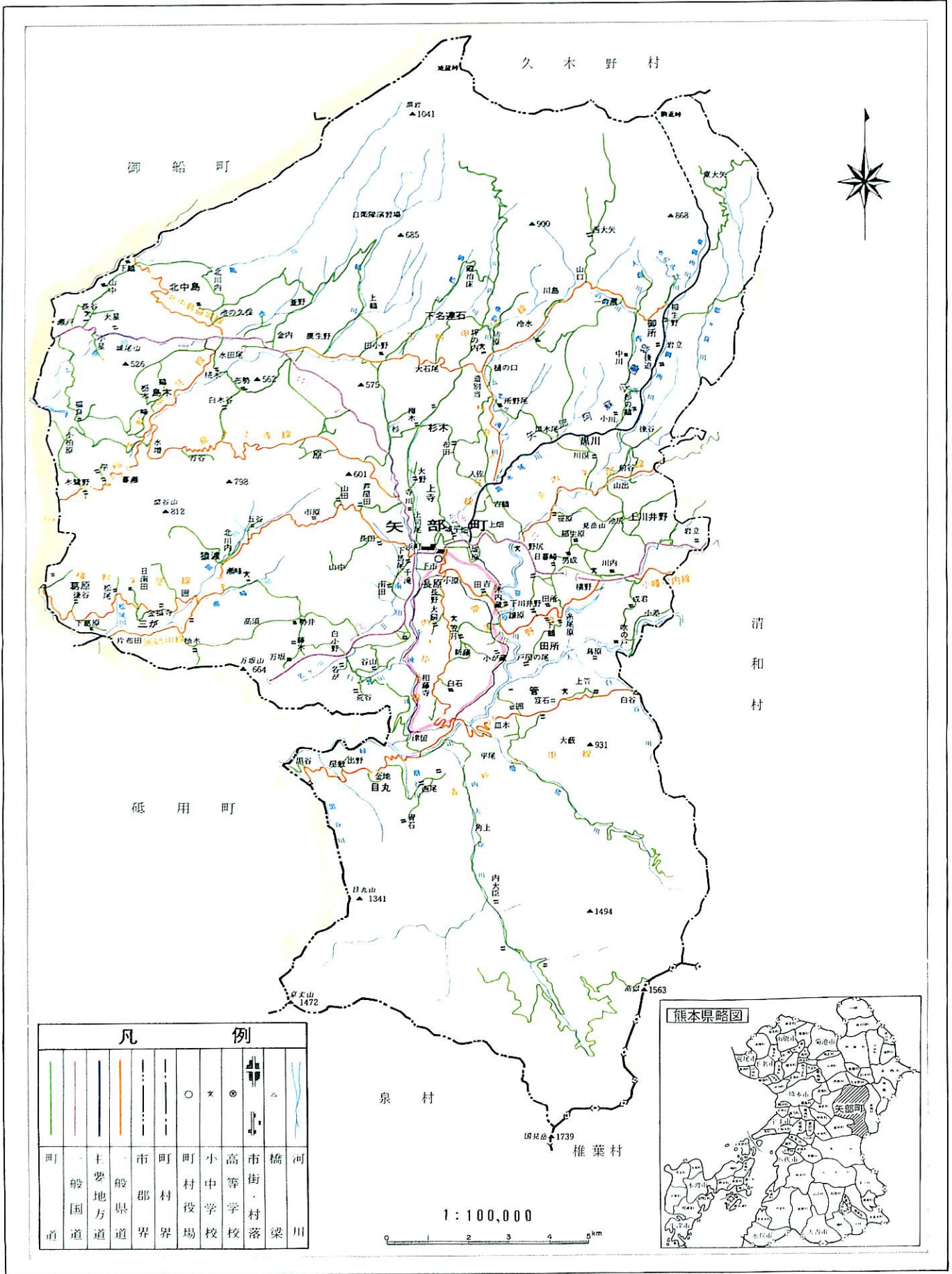
通潤橋は当初は、「吹上台眼鑑橋」と呼ばれていたが、肥後藩大奉行であった「真野源之助」が「易損卦程伝」にある「澤在山下其氣上通潤及草木百物（サワハサンカニアリソノキウエニツウズ ウルオイハ ソウモク ヒャクブツニオヨブ）」という文章から採択、「通潤橋」と命名した。



2002年(平成14年)改修時 3本の通水管が見える



白糸台地を潤し続けて来た通潤橋

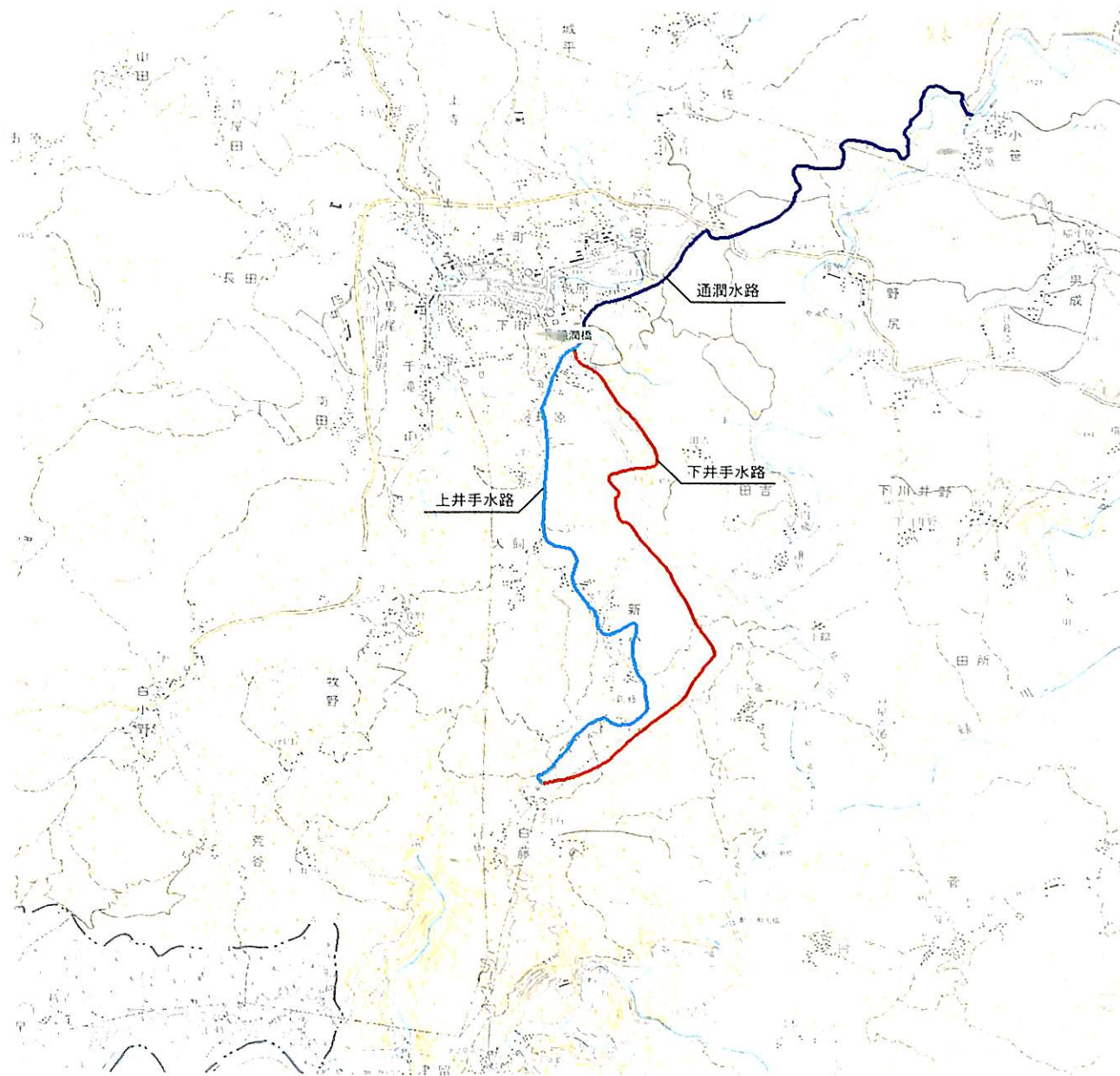


凡		例	
	町		市
	一般国道		主要地方道
	市界		町界
	町役場		小中学校
	高等学校		市街村落
	橋		河川



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号:昭54九規第246号)

矢部町役場



白系台地用水路配置図

祝 辞

熊本県知事 潮谷 義子

このたび、通潤橋架橋150周年を迎えられ、この記念すべき年に架橋最大の功労者である布田保之助の功績や、通潤橋架橋の技術・補修の歴史を一つにまとめ、後世に残し伝えるために本記念誌を発刊されることは、大変意義の深いこととお喜び申し上げます。

150年前、惣庄屋布田保之助の郷土を思う熱意、種山石工の先進の技術、多くの村人の労を惜しまない協力により完成した通潤橋は、今日に至るまで地域の大切な水路橋として白糸台地を潤し、地域の米作りを支えてまいりました。また通潤橋は、灌漑のための通水管をとおす橋であり、美しいアーチを描く独特な石組みを有することから、技術史・文化史上貴重な建造物として認められ、昭和35年に国の重要文化財に指定されています。

熊本県では、平成11年度から14年度にかけて、この郷土の大切な宝である通潤橋を後世に引き継ぐことを目的に、漏水防止の補修工事を行う一方、布田保之助が通潤橋を建設した経緯や、県内各地に残る石橋の文化を伝える通潤橋資料館を建設しました。これからも、通潤橋をはじめとする地域の歴史遺産を、観光振興や地域振興に活かしてまいりたいと考えております。

また、通潤橋150周年記念碑の「通潤魂」という文字は、私が書かせていただきましたが、この言葉には、「豊かな心で、勤労の喜びを知り、創造の喜びを求め、不屈の精神を培うこと」という意味が込められていると伺いました。布田保之助の地元への想い、たゆまぬ努力を表すこの「通潤魂」の理念もまた、通潤橋とともに後世に伝えていくべきものと思います。この記念碑を御覧になる多くの方々が「通潤魂」という言葉の意味を知り、通潤橋に対する理解と愛着を深めていただければと思っています。

平成16年8月に皇太子殿下が来熊され、通潤橋の放水の様子を御視察されました。白糸台地に住む人々に水を届けようという布田保之助の熱い想いと、石工達の優れた技術と工夫の結晶である通潤橋は私ども熊本県民にとっての誇りであり、150年という節目の年に、今なお農業用水施設として活用されている通潤橋を殿下に御覧いただいたことを、光栄に思っております。

本誌発刊にあたり、これまで通潤橋の維持管理に携わってこられた通潤地区土地改良区の皆様方の長年の御尽力に敬意を表しますとともに、関係者の皆様並びに地元の皆様方のさらなる発展を祈念しまして、御挨拶いたします。

平成16年12月吉日



記念誌刊行のことば

矢部町長 甲斐 利幸

風雪150年に耐えて、通潤橋は自糸台地の草木百物を潤した。

五ヶ滝川を跨ぐシャープな幾何学的姿は現実に堅牢で重厚さはすっかり周囲に溶け込み熔結凝灰岩という材質は温かみもあり布田翁の精神を見事に具現している。

通潤川水路の壮大な企画が江戸の末とはいえ封建制の色尚残る時代に実現したことにあらためて驚きを覚えるとともに、この成功が布田翁の人間性にも大きく因るものであると評価している。

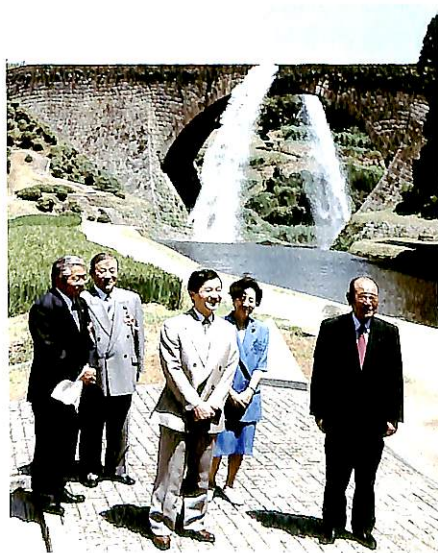
しかも時の為政者として民を思い一途にひたすらに情熱と精魂を傾けたことが関係する郡代と藩を動かしたことになり、又布田翁の人となりや彼等が信頼したものと考え。

更に民も共鳴共振したことにより事業が成功したものである。為政者は、民の豊かさを求めるものである。

民の豊かさは民の幸福にも通ずる。民に豊かさを求めるため色々な事業を進めるがその結果が通潤橋ほど顕著である例も珍しい。

通潤橋150周年に係る色々な難事にとりくんで来たがその中で古い資料のなかから新しい事実があぶり出されたりした。それからは、先人の偉大な人間像に関するものが多い。

あらためて温政刷新の思いを熱くして矢部町の将来を夢多きものにしたいと考えている。通潤橋150年にあたりこの度記念誌を発刊することとなったが、我が町の誇るべき通潤橋が姿、形だけでなくこれに象徴される、矢部の民の精神風土の素晴らしさを後々にも語り伝える媒体ともなればと期待している。



平成16年12月吉日

記念誌刊行にあたって

通潤地区土地改良区 理事長 本田 陽一

「棚田を潤して150年通潤橋in2004」本年7月29日150年前に通潤橋を渡った水が初めて白糸台地に届いた日として記念すべき日を迎える事となりました。

150年の風雪に耐え今尚、建造された当時のままの姿で日夜白糸台地に水を送り続けた通潤橋とこの一大事業を成し遂げた布田保之助翁の偉業に対し私たち水下民一同は改めて深く感謝の心を捧げる誓いをしました。特に国の重要文化財として、指定を受けて以来通潤橋を観光として、又研修など様々な思いを持って、訪れる人々の数は年々増しつつあるように思えます。百聞は一見にしかず。人々は豪快な放水を見て、又雄大な石積みの姿にふれて大方通潤橋を理解出来たと自分に言い聞かせる人も少なくないのではないのでしょうか。



地元で暮らす私たちにしても、通潤橋の真の姿にふれる機会はそれ程に多い訳ではありません。たしかに、通潤橋の歴史については交々と先人達によりロマンに溢れる話に交えて伝承され、それなりの説明がなされてもきました。思い様によれば150年は、それほど遠い昔のことでもありません。しかしながらこの様な大きな石橋を当時は、現代のように文明の利器がなかった時代にどのように建造出来たのであろうかと云う素朴な問いにも即答を求められると戸惑いが生れます。この度偶然とは云え、通潤橋完成150年を迎えるに当たり私達の眼前にいかにも眩しいばかりの逸品、歴史的贈り物とも云える「南手新井手記録」が提示されたのであります。これにより通潤橋建設当時の詳細が一挙に明らかにされる事となりました。通潤橋の建造が当時いかに技術的限界を超えて未踏の課題を山積していたことか、そしてこの成功へ向けた足どりがいかに当時の社会的政治的制約に対して苦慮を要する事であったのか布田保之助ならではの創造性不屈性が輝きを放ったところであり、この南手新井手記録との出会いは、私達、水下民にとっても衝撃的な出会いとなりました。いきなり当時の時代へと引き戻された思いであり、歴史のロマンスとは常にその真実に迫るところにあるように思えます。

今、私達の位置はその扉の前でありその全貌に至るにはまだ道は遙かなものかも知れません。今回本誌の編集を担当された方々は、全て地元育ちの方々であり生れた時から通潤橋と共に生きそしてそれぞれに個性を磨きぬかれた方々であります。とは云え地元で自らの力で記念誌をと参集した面々は物書き等の経験のない集まりであり恐らく出来合いは「雑木林」の様にならざるを得ないだろうと想像したものです。出来の拙劣さを恐れず一人ひとりが担い手になろうと南手井出に関わる生きた体験記もそれぞれに又寄稿戴きました。本誌の編集は、まさにそれらの方々の熱意溢れる好意の結集であり通潤橋150周年の時代に生き合わせた人々の次の世代に対する心からのメッセージとなる事を祈念するものであります。最後に、次の担い手世代ともなる白糸第一小学校の二人の児童生徒の心のこもった寄稿を戴いた事で、本誌が更に厚巻にくくれる事を心からお礼を申し上げます。

平成16年12月吉日